

アクティヴ・ラーニングとしての 「感性教育」は大学生にとって どのような学びの体験か？

小 林 隆 児

What Kind of Experience of Learning for University Students is
“Sensibility Education” as Active Learning?

Ryuji Kobayashi

本誌前号で筆者は「感性教育」をアクティヴ・ラーニングとして位置付け、大学の新生を対象に試み、従来の大学教育では味わえない「主体的・対話的で深い学び」に相応しいものであることを報告した（小林、2019a）。学生たちの多くが「感性教育」でこれまでの大学教育では味わったことのない様々な気づきを体験していた。そこで、今回は同じく大学1年生を対象に半年間の「感性教育」を実施し、その体験談を自由に語ってもらった。その内容を分析すると、彼らは他者を観察し理解するという営みが、いかに自分の内面と深く関わっているかに気づくとともに、自己理解を深めることが他者理解に不可欠であることを体感していることがわかった。この結果より、「感性教育」が対人援助技術職の養成において、自己への新たな気づきを生むとともに、人間観察力を深めるための重要な方法であることが示唆された。

はじめに

最近、国家資格の絡む大学教育では、カリキュラム内容に国家資格で求められる必要最低限の知識がきめ細かく網羅され、講義の仕方もそれに沿った専門知識の教授に偏りがちである。そんな状況に置かれている学生たちは、大学入

学までの受験教育の縛りからやっと解放されたのもつかの間、再び大学受験に代わる国家資格取得を目指した受験教育に晒されている。

その一方で主に義務教育の世界では、従来の画一的で受身的な座学中心の教育の弊害が指摘され、それに代わって「アクティヴ・ラーニング」すなわち「主体的・対話的で深い学び」が盛んに取り沙汰されるようになった。昨今の人工知能の応用が現実味を帯びるといふ急速な時代の変化を前にして「新しい時代に必要となる資質・能力の育成」が急務となっているからである。そこで求められているのは「学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性の涵養」、「生きて働く知識・技能の習得」、「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力の育成」である（藤井、2017）。

私はこれまで一貫して対人援助を生業とする人材育成に従事してきたが、最近とみに考えるようになったのは、対人援助の際の人間を観察し理解するための基本となる力（これを私は「臨床力」と呼んでいる）をいかにして養成するかという問題である。そのために生み出したのが「感性教育」（小林、2017b）である。

これまで大学で、対人援助職を目指す学部生、大学院生、さらには対人援助職に従事している社会人を対象に感性教育を積み重ねてきた（小林、2016a、2017a、2017b、2017c、2018a、2018b、2019a、2019b）。特に最近では、大学に入学して間もない学生を相手に感性教育を行うことの重要性を痛感するようになった（小林、2019a）。その最大の理由は、大学での専門知識の教授がややもすると、生身の人間を観察し理解する上で誤った先入観を与えるという弊害の方が少なくないという危惧の念を抱くようになったからである。なぜなら、感性教育で乳幼児と母親との交流場面を観察すると、専門知識が先入観となって目の前の母子を観察する目を曇らせ、母子双方の実際のこころの動きを感じ取るのが困難な対人援助職者に少なからず遭遇してきたからである（小林、2017）。

私が受けた大学教育は医学部であったため、実習教育の場は医学部に隣接する附属病院で学部教育と同じ教員による指導を受けたが、今私が所属する社会福祉学科では実習機関を外部に委託し、その指導も実習機関の職員が担当する

という形態が取られている。学部教育に従事している教員も実習の事前・事後指導、さらには実習巡回を担当しているとはいえ、実際の実習現場で直接的な指導に関わることはまずない。対人援助技術を学ぶ現場実習と大学での専門教育とが現実には乖離しているのが現状である。

対人援助職の専門教育が実習重視の流れに傾いているとはいえ、今日の大学教育は人間をどのように観察し、どのように理解すればよいか、その臨床力を高めるための生身の人間を前にした直接的な教育や指導はほとんどされていない。そんな状況で果たして対人援助職を目指す学生たちの臨床力を養成することができるであろうか。本来、臨床力は、現場での生きた経験を基礎に、それに沿ったかたちで専門的理解が積み重ねられることが必須である。そのことによって初めて生身の経験が血となり肉となると考えられるからである。

I. 目的

以上の問題意識をもとに、私は大学入学直後の学生たちにアクティヴ・ラーニングとして感性教育を試みた（小林、2019a）。そこで一定程度の手応えを得たことから、その効果をさらに深く検証すべく、同じ学年の大学生を対象に、今回新たなかたちで後期半年間の感性教育を試みたので報告する。

II. 方法

1. 具体的な各回の講義内容

1年生を対象とした科目で私が担当しているものの一つに「医学一般Ⅱ」（後期開講）がある。「医学一般」は通年科目で「医学一般Ⅰ」（前期）と「医学一般Ⅱ」（後期）に別れている。「医学一般Ⅰ」は社会福祉士国家試験指定科目のためにカリキュラムの内容は詳細に規定されているが、「医学一般Ⅱ」にはそのような制約はない。

そこで「医学一般Ⅱ」を「感性教育」を中心としたものにするすることで、患者の観察と理解を高めることで臨床力養成につながるのではないかと考えた。その講義 15 コマ各回の内容の骨格は表 1 に示した通りである。

表 1：15 コマの講義内容

回数	講義内容
1	オリエンテーション、こころとからだについて考える（課題 1）
2	こころとからだについて考える（続）（課題 1）
3	患者をどう捉えるか（個をみる、症状から理解する）（課題 2）
4	患者をどう理解するか（病歴から理解する）
5	患者をどう捉えるか（関係をみる）（課題 3）
6	ある学生（A子さん、学部 2 年）の感想文を紹介し、自分の見方、捉え方と比較して考える（課題 4）
7	私の解説 その後の感想（課題 5）
8	各自の感想を紹介する
9	テレビ番組「プロフェッショナル仕事の流儀」(注) を供覧 その感想（課題 6）
10	事例 3 を供覧 感想（課題 7）
11	事例 3 の解説 その後の感想（課題 8）
12	事例 12（挑発行動）の解説 感想（課題 9）
13	事例 4 の供覧（課題 10）
14	事例 4 の解説
15	総括

(注) 2018 年 9 月 17 日（月）に NHK 総合テレビで放映された特別企画「プロフェッショナル子ども大学」

2. 事例供覧について

ついで、事例供覧について説明しておこう。具体的にある事例（事例 2、3、4、11¹）の母子交流場面を供覧。その際、①最初に、子どもに焦点を当てて観察するよう指示し、②つぎに、母子関係に焦点を当てて観察するように指示した。③その後、両者の視点の違いが観察の内容にどのように反映したかを考えるよう指示した。その際、学生にはあくまで観察して感じたことを自由に述べるように指示した。正解を要求しているのではなく、あくまで自分がどのように観察するか、そこにどのような特徴があるか、そのことに自分自身で気づくことがもっとも大切であるとの説明を加えた。④その後、ある学生（A子さん、学部 2 年）の感想文を紹介し、自分の見方、捉え方と比較して考えてもらった。⑤最後に、私が事例の見方について解説した。⑥ついで、その他いくつかの事例を供覧の上、学生に観察して感じたことを自由に述べてもらった。

¹ 拙著『「関係」からみる乳幼児期の自閉症スペクトラム』の記載事例番号に準じている。

3. あるテレビ番組の供覧とその理由

第9回に供覧したテレビ番組について解説しておこう。NHK総合テレビ「ザ・プロフェッショナル仕事の流儀」で、2018年9月17日に放映された特別企画「プロフェッショナル子ども大学」である。小学生を対象に、「世の中の人があつと驚くスナック菓子をつくろう！」をテーマに、仕事の面白さと奥深さを経験させようとの試みで、講師を務めたのが商品開発の伝説的なヒットメーカー佐藤章氏（当時59歳）であった。彼はキリンビールをはじめとするいくつかの企業の商品開発でつぎつぎにヒットを飛ばしたことでよく知られている。

氏が子どもたちに商品開発の極意ともいえる信条をいくつか語っていたのがとても印象深かった。その要点を一言でいえば、「自分にウソをつかない」ということであった。何か新しい商品を生み出そうとして考える際にそれが最も大切なことだという。その意を、彼はことばを換えて、「自分の心が動くかどうかが大切である」、「自分の生まれてから今日までの経験の中に（自分が生み出したものの）“好き”がある」という。また「自分の心の中にしか正解はない」、「ウソのない思いにこそ熱は宿る」ともいう。要は、誰かの評判を聞いたり、アンケートをとって多くの人の好みを聞いたりしても、そのなかから「世の中の人があつと驚くようなものは生まれない」というのだ。自分の過去の経験を素直に振り返るなかでしか自分独自のものは生み出せないと、確信に満ちたことばで語っていた。

氏の語りを聞いた私は、自分の臨床教育として位置付けている「感性教育」の目指すところとあまりにも通底するものがあったので、深く共鳴した。一言で言えば、他者を観察し理解するための手がかりは、自分の中にある。それゆえ、自己理解を深めることが他者理解を深めることに通じるということである。ぜひとも学生に見せたいと思いついたのである。

4. 講義終了時に課した体験談について

以上の内容で講義を実施し、最後に成績評価とは関係ないことを明示した上で、学生に講義でどのようなことを体験したか、率直に感じたままに自由に述

べて欲しい、と説明し、提出するか否かも自由であることを説明した。なぜなら、学生に率直かつ本音の体験談を述べて欲しかったからである。よって、ここで検討する対象となった講義の体験談は聴講した学生全員によるものではないことを断っておく。

なお、体験談を纏める際に、従来の講義と比べて今回の講義をどのように感じたかについてもできれば述べてほしいことを、こちらの希望としてあらかじめ伝えておいた。

Ⅲ. 対象

今回の対象となった学生は、2018年度後期に開講された「医学一般Ⅱ」を受講し、15コマのうち3分の2以上出席した者（成績評価対象の基準枠）、計86名（男/女比=20/66）である。学年は主に1年生70名（男/女比=19/51）であったが、他に2年生15名（男/女比=0/15）、3年生1名（男/女比=1/0）が含まれている。

なお、同年度前期、同じ1年生を対象とした開講科目「基礎演習」でも少人数（21名）を対象に「感性教育」を試みている（小林、2019a）ため、両方とも受講した学生が4分の1程度いた。

最終的に講義の感想を寄せてくれた学生は計50名（男/女比=12/38）（58.1%）、学年別には、1年生34名（男/女比=11/23）、2年生15名（男/女比=0/15）、3年生1名（男/女比=1/0）であった。

Ⅳ. 結果

1. 学生たちの体験談の内容分析

半年の講義を受講した感想を自由記述で記載してもらったため、その内容は多岐にわかっているが、そのタイトルのみを表2に示した。その内容を分析した結果、以下のようにまとめることができた。

表 2：体験談のタイトル

番号	性別	タイトル
01	男性	眼の養成
02	女性	この講義だから得られた経験と学び
03	女性	映像を見て学んだこと
04	女性	社会を見つめる新たな視点の獲得
05	女性	着飾らず、素直に
06	女性	自分から
07	女性	視野を広げるため
08	女性	私が医学一般Ⅱを受講して感じた事
09	女性	私にとっての新たな学び
10	女性	乳幼児期にもたらす心の習慣について
11	女性	鏡
12	女性	新しいものの見方を手に入れることができた半年間
13	女性	ありのままの私
14	女性	自分自身とも向き合っていく
15	女性	母子関係がつなぐコミュニケーション
16	女性	この講義で得たこと
17	男性	広がる自分の世界
18	女性	対人関係における観察、考察での学び
19	女性	自分を見つめる時間
20	男性	自分が学んだこと
21	女性	この講義を通して
22	女性	ことばのない母子交流場面を読み解くこと
23	男性	自分の経験からくる先入観とみんなの意見
24	女性	自分の感じたことを大切に
25	女性	自分の足りない所
26	男性	この講義を振り返って
27	女性	学びの深さ
28	女性	気づきの大切さ
29	女性	無意識を意識する
30	男性	これまでの講義を受けて
31	女性	自分自身への気づき
32	女性	新しい気づき
33	女性	気づき
34	男性	物事の意図を考える
35	女性	ビデオを観てからの変化
36	女性	きっかけ
37	男性	黄金体験（ゴールド・エクスペリエンス）
38	女性	新たな発見に出会えた授業
39	男性	あらゆる視点での学び
40	女性	この講義を終えて
41	男性	ビデオを見て
42	女性	素直とは
43	女性	広い視野を持って考える大切さ
44	男性	人の心を知るために
45	女性	比較して私を振り返る
46	女性	自分と向き合うこと
47	男性	この講義を終えて
48	女性	自分を知る
49	女性	タイトルなし
50	女性	変化

1) 正解にとられる自分への気づき

高校生活までの受験勉強中心の学業生活を送ってきた大学生たちは、(31 女性)「無意識に正しい答えを言わなければいけないというプレッシャーを常に持つ」ようになっている。その縛りは恐ろしく強いものであることが、感性教育を試みると真っ先に痛感させられることである。だからごく自然に(22 女性)「正解がないようなことを考えることは、今まで自分はとても苦手としていて、どこかでみんなこんなふうにいるよね、これが正しいよね、間違ったことは言っていないはずだと考え、いつも正解を探そうとしてする」ようになっている。感性教育によって(08 女性)「正解ばかりにとられる必要はまったくないということが分かり」随分楽になり、(49 女性)「問題は答えが一つではないので、とても考えさせられる」体験となっている。

2) 先入観にとられる自分への気づき

様々な表現で学生たちは自分がいかに先入観にとられてしまい、眼前の母子交流そのものをありのままに感じ取ることが難しかったことを実感をもって語っている。たとえば、(02 女性)「私も障碍や病気などの診断名を参考にしながら、相手のことを観察してしまった」、(13 女性)「私は思い込みが激しくて、『子どもが母親に甘えるのは当然のことだ』『母親が子どもを撫でるのは愛情表現だ』といったような私自身の思い込みに左右されがちだった。」、(15 女性)「母親はこのような存在であるべきだと、勝手に母親の理想を自分の中で決めつけていた。同様に子どももこのようなことがあってこそ本来の子どもの姿であると見解を決めていた。」などと彼らは語るとともに、(09 女性)「自分の考え方の傾向や固定観念があることに気づき、客観的に自分を見つめ直すことができた。」、(18 女性)「固定概念を捨てて、いつも新しい目で場面を観察する必要があると考える。」、(23 男性)「自分が思っている以上にこれまでの経験からくる先入観にとられているところだ。・・・経験にとられている先入観によってだいたいなどを見逃しているという言葉に私はすごく感銘を受けました。」、(33 女性)「自分の意見を率直に書くようになったことによって、先入観をもって物事を見てしまっていることや、自分の考え方の特徴に気づくことができました。」、(47 男性)「先生が先入観と偏見で物事を見てはいけないといっ

ていた意味が分かり、密かに感激しました。」など、感性教育で新たな気づきの体験を喜びをもって語っている。

3) 違和感を持ち、それを言葉にすることの大切さ

さらに、(03 女性)「『おや』と思ったことを大切にしておいて違和感を感じて、体験することが良いということを学んだ。」のように、まずは自分の中に浮かんだ違和感を大切にすることを学んだと語る学生がいる。このことはとても大切で、まずはこの違和感を大切にすることから出発することが求められると私は考えているからである。

4) 些細な言動に子どもの気持ちが表れていることへの気づき

対人援助の実際においてもっとも重要なことの一つだと私が考えているのが、些細な言動に子どもの気持ちが表れていることへの気づきである。感性教育でしかできないことの一つである。学生たちは異口同音に次のように感想を述べている。

(02 女性)「子どもの発する声や言葉、歩き方、遊び方、目線、泣き方、母親の子どもに対する接し方、抱っこの仕方、親子が遊んでいる様子など、ほとんど全ての言動に子どもと母親それぞれの気持ちが表れている。」、(09 女性)「相手の行動や表情、声の大きさ・トーン、目線などクライアントは言葉でなくてもさまざまな情報を私たちに伝えている。」、(11 女性)「人の言動には表面上に表れない思いが隠されているということを理解し、心に留めておく必要があると感じました。」、(12 女性)「自分では気づかなかった点や面白い点に気づくことができ、とても頭に入ってきた。やはり、『百聞は一見に如かず』ということわざは本当なのだ実感した。長々と文章を読むことより、実物を見たほうが本当にわかりやすかったし、教科書には載っていない細かな動作やリアルな行動が見れて面白かった。」、(18 女性)「今までは当たり前のことだと思っていた些細な言動が実は注目すべきものであるということに気づくことができた。また、一つ一つの細かい仕草にも注意を払うことが観察において大切だと改めて感じた。自分の気持ちを伝えることが難しいと感じている人は多く、面接の中で微妙な表情の変化や視線の動きなどを見落とさないようにしっかり観察しなければならないと思った。」、(32 女性)「人間の行動から気持ちを読み取れる

ということも知った。手の位置や顔の向き、視線など、集中して観察するといろいろなことに気づく。」、(40 女性)「遠慮や傍から見たら素っ気ない態度、意地を張っているような態度の中にも心細い気持ちやかまってほしい気持ち、甘えたい気持ちがあり、それに敏感に気づくことが大切であると感じた。」、(41 男性)「今まで赤ちゃんや就学前の小さい子どもたちはあまり深いことを考えずに生活を送っていると私は考えていたが、母親と子どもの関係は私が思っていたより複雑だということが映像を見てわかった。・・・子どもたちはまだ意識していなくても、母親に対する態度がはっきりと行動に現れていることがわかった。」、(49 女性)「もう一度、ビデオを見たとき、子どもの表情、子どものしぐさ、母親の行動の違和感、様々な点に気づくことができました。着眼点を変えるだけで気づくことが多くあり、驚いたのと同時に、自分は細かいところまで見ることができていなかったと思いました。他人の意見を聞くことで、それが自分の新たな発見になり、自分の視野が大きく広がりました。」などである。

これらを読むと、母子の表情はもちろんのこと、些細な仕草や声の調子などに母子双方のこころの動きを感じ取ることができることを、学生たちは実感を味わいながら体験していることがわかる。人間観察力を養う際に、まずもってこのことが大切にされなくてはならない。それなくして専門知識ばかりを身につけることは、先入観で人を観察するという頭でっかちな対人援助者を育てることになる。

5) 多様な視点を持つことの大切さ

最初は大雑把にしか観察できなかった学生たちが、他の学生たちの感想を聞くなかで、自分にはなかった視点を学び、新たにビデオを観察すると、自分でも見えてくるという驚きと喜びを口にする学生たちがとても多い。具体的には以下の通りである。

(01 男性)「見方を変えるだけで考え方が変わり、知らなかったものが見えてくる。物事を多角的にとらえ、その中にいる人と自分をシンクロ・リンクさせることにより、心理的にその人の立場になることで、『こころ』というものがわかるのではないだろうか。」、(03 女性)「どこに焦点を置いて映像を見るかに

よって、見方が全然違うことを学ぶことができ、これからは様々な視点で映像を見ていかなければならないと思った。」、(07 女性)「他の人の考えや感想を公開して比較することは非常に良く、他の講義でも取り入れるべきだと思った。自分の考えを書くだけでなく、他の人がどのように感じ、考えているのかを知ることで、自分の視野を広げることができる。」、(08 女性)「他の授業では、自分自身の感想を書いて終わり、というパターンが多いので、様々な人の考えを聞くことができるということは良いことであると感じた。」、(21 女性)「これだけ他人の意見を聞ける講義はなかなかなく、価値観や物事の考え方がとても広がったと思う。」、(23 男性)「他の講義と違いみんなの意見がよくわかり自分の考えをもっと深めることができてすごくいいと感じた。自分一人ではわからない点も知れてとても勉強になったからだ。」などである。

自らの視野の広がりを実感できることが大きな喜びとなっていることが伝わってくる内容である。

6) 自分への新たな気づき、自己理解の深まり

さらに驚かされるのは、母子という他者を観察しているにもかかわらず、自分の内面にあるものへの気づきを体験し、自分に対する理解が深まったことを実感をもって語っている学生たちが少なくないことである。具体的に取り上げてみよう。

(01 男性)「その人その人の心理の奥底には、自分が自覚していない無意識的な『もの』があると感じた。それは自分の生い立ちやこれまでの環境に起因するのかもしれないと感じた。」、(06 女性)「私はなんだか常に受け身だったと今は感じています。しかし、私が小林先生の授業と出会い『自ら学ぶ』という姿勢を身につけさせていただきました。それと同時に、自分から学ぶってこんなに楽しいんだということも分かりました。」、(09 女性)「自分が一つのものにだけ焦点を置き物事を考える傾向があると感じた。」、(11 女性)「自分が体験したことでも得た価値観や無意識の中にある自我によって捉え方は変わると思います。つまり、他人のことを理解しようとする際にまず必要なのは、自分を知ることだと考えました。」、(18 女性)「普段は気づくことのない自分のもつ価値観や思考を知ることができた。・・・日常の中にも無意識に当たり前だと感じている

ことがあると思った。自分にとっては当然のことだと思っていても、他の人にとってはそうではないかもしれないというように想像力をもつことが必要だと感じた。」、(20 男性)「小さい頃から今までの経験から、今の自分の見方、捉え方、考えが形づくられていると思うと、感慨深いものがあります。しかし、他の人の意見を聞いて自分の至らない部分が色々と浮かんで来て、自分はどのように薄っぺらいことしか考えられないのだろうかとか、どうしてあんな風にうまく言葉に表現できないのだろうかなどと思い、少しショックを受けてしまうこともありました。」、(22 女性)「自分のものの見方、捉え方には自分の生き立ちが少なからず関係しているのだなと思いました。」(29 女性)、「無意識を意識できるように心がけるようになった・・・自分は人の意見に影響されやすいところや、自分の中で自分の意見に反論しながら延々と考え込んでしまい、はっきりとした意見が言えなかったり、判断が遅くなってしまうところがあります。でもそれは決して悪いことなどではなく、そうすることで自分の中の無意識を探り、より深くで自分らしい考えに至れるのだということを学びました。」、(30 男性)「その人の特徴や行動を一連の流れから観察できるようになれば、これからの人間関係作りにも活かせるのではないかと思います。」、(34 男性)「同じ大学生でも人よりも考えることや、物事を見る視点が変わってくるということに衝撃を受け、また、自分の考え方や物事の見方が浅はかであると感じた。」、(36 女性)「自分自身を見つめなおす良い機会となった。」、(42 女性)「他者の人間観察を行うことによって、自身の他者における着目点、無意識の考え方や感じ方が露わになるということを知ることができた。」、(45 女性)「授業を重ねていくにつれて、何かを言語化するためには、まず『誰の』『どの行動』に違和感を覚えたのか、それに対して自分は『どんな気持ちになったのか』という点に着目すれば、ある程度言語化することができることに気づいた。」、(46 女性)「自分で考えるということは自分自身と向き合うことだということにも気づかされた。」などである。

これらを読むと、感性教育が単に専門知識を教授する座学とはまったくこととなった学習体験となっていることがとてもよく伝わってくるのではなからうか。

7) 自分に向き合うことの大切さ

母子という他者を観察するという営みから自分に向き合うことの大切さを学生たちは学んでいる。学生たちの率直な感想を以下取り上げてみよう。

(04 女性)「素直に自分の意見を述べることで自分の考えていることを見つめなおすことができた。」、(05 女性)「優等生のような着飾ったことを書かなくてもよい、素直な気持ちで講義に取り組むことができ、とても良い経験になった。」、(06 女性)「このビデオ(テレビ番組)を見たとき、私はこのことについてずっと悩んでいました。しかし、映像の中で『自分にうそをつかない』という言葉を耳にし、『私は自分にうそをついてないかな』と感じ、そこからは省略しますが、私は、将来に向けて大きな決断をすることができました。まさか、この授業で自分の将来に対する悩みが晴れるとは思っていませんでしたが、私は『自分にうそをつかない』という大切な言葉に出会うことができましたし、それと同時に、大人になるにつれてこの『自分にうそをつかない』という感覚を、忘れていないようで、忘れてしまっているのではないかと感じました。」、(11 女性)「他人への関心の薄さや、自分中心に物事を考えてしまっていることに気付きました。」、(19 女性)「自分を見直す良い機会を得ることができる貴重な時間であると私は思います。他の講義では専門職として必要な知識などを新しく習っていくばかりであり、先生の講義では、他の講義にはない自分と向き合うことのできる良い機会であったと思います。」、(36 女性)「自分自身の考えに自信が持てる感覚を知った今は、『諦めずに考えることの重要性』に気づけたため、あなたの考えを述べなさい、という問いを与えられた時には中途半端ではなく、自信が持てるような答えを述べるようにすることをとても心がけるようになった。」、(42 女性)「素直になるためには、これまでの人生で築き上げてきた偽りの自分ではなく、本当の自分と向き合わなければならないと思う。」などである。

これらを読むと感性教育の大きな可能性を感じるのではなからうか。

8) 自己洞察を含む自己理解の深まり

私が感性教育で目指しているものは、自己洞察を含む自己理解の深まりによって他者理解が深まることである。驚くべきことに、今回の感性教育で少な

からずの学生たちがそのことを語っているのだ。具体的には以下のような内容である。

(09 女性)「自分の育ってきた環境や関わってきた人が自分のものの考え方や捉え方に大きく影響するということから、子どもの育つ環境はその子どものその後の人生にも大きく影響を与えるものであり、重要な役割を担っていると感じた。」、(13 女性)「『ありのままの私でいいのだ』『別に着飾らなくていいのだ』ということを学んだ。ありのままの自分でこれからの人生をしっかりと歩んでいこうと思った。」、(14 女性)「自分の生い立ちを振り返り、どういった経緯で今の自分の価値観や見方や捉え方が形成されたのかを考えていく。」、(31 女性)「母子関係の複雑さや観察の大切さを学んだだけでなく、自分自身の理解もすることができた。観察をし、それを他の学生や先生の意見と比較することで、自分だけが持つ観察の特徴を知ることができた。その自分だけの特徴を知るのはとても新鮮で楽しかった。」、(36 女性)「甘えん坊であるがゆえに、考えることにも誰かに甘えていた。」、(42 女性)「人間観察をすることで、生育歴と現在のつながりの強さを知ることができた。できるならば、タイムスリップして自分が赤ちゃんの時、母とどのような関わりをしていたのか、観察してみたい。そして、さらに自己理解を深めたいと考える。」などである。

母子観察が単に目に見えるものだけで事足りるものではなく、彼らの生き様そのものが彼らの言動を観察すると見えてくる。つまり、母親のみならず乳幼児期の子どもにおいても、彼らのこれまでの歴史が目の前の母子交流の様相に色濃く反映していることに気づいているのだ。このことに思いを寄せている学生たちがこれほどまでにいるということは、感性教育を試みている者としてこれほどうれしいことはない。

9) この講義で初めて味わったこと

最後に、従来の講義と比較してこの講義で初めて味わったことがどんなことか、学生たちは率直な言葉で表現している。それらを以下の紹介しよう。

(01 男性)「先生や周りの着眼点などに着目して、2 回目のビデオを見た際に、1 回目よりもはるかにそのビデオの本質が見て取れると感じた。この時の気づきの気持ちよさ、そして面白さは他の講義ではなかなか味わえないもので

ある。」「他の講義では、あまり口にしたくないが、生徒の受動的な講義がほとんどだ。教授からのテキストやレジュメ、授業そのものが教授から生徒への一方的な講義で、それは形だけの『講義』なのだと思う。ましてや、生徒自身が能動的に考え、自分の気持ちそして見方を体現することなどできてはいない。」(06 女性)「私が小林先生の授業を受け学んだことは、『自分から学ぶ姿勢を見せる』ことの大切さ、そして自ら学ぶことの楽しさです。」、(09 女性)「何事も知識ばかり持っていたとしても、実際に実践に生かすことができないのならば、知識がない場合と同じであると感じた。」、(14 女性)「とても実践的で、母子関係について学ぶだけでなく、自分とも向き合うことができる貴重な経験となった。」、(22 女性)「改めて自分の生い立ちを振り返りながら考えることの気づきは他の講義では味わうことはないだろうし、今後の人生においての自分の財産の一つになると思いました。」、(23 男性)「他の講義と違いみんなの意見がよくわかり自分の考えをもっと深めることができてすごくいいと感じた。自分一人ではわからない点も知れてとても勉強になったからだ。授業の単語を覚えても、この授業で見たようにいざ観察してみると気づかない点が出てきており、覚えた単語を使う暇など無いと感じた。」(28 女性)「自分の技術を磨き、それを実感できる授業の方が満足感が持てる。実際にあった事例を映像で見られるのはとても勉強になるということだ。」、(38 女性)「授業回数が増えるとともに、自分で細かいところまで気がつくようになり、新しい発想を生み出すことができるようになった。子どもだけではなく、母親やストレンジャーの心情にも考察できるようになった。そのため、授業に対する楽しみや喜びも増していった。」「自分の感受性や注意力の向上につながる良い授業となった。」、(46 女性)「ほかの授業にはない自分と向き合うという経験ができたように感じる。大学に入ってから授業では、社会福祉の基本的な知識、考え方を教わってきた。そのため、自分で考えるということをほとんどしていなかった。」、(47 男性)「この講義のような授業形態をとることによって、障がいがあるのかをリアルに考え、感じることによって新しく感性を身につけ、自分の中で昇華することができるのではないかと考える。」などである。

我が田に水を引くようで気がひけるが、私はこれらの学生たちの感想を読む

ことによって、やってよかったと率直に思ったものである。

2. 具体的な学生の体験談

つぎに私にとって非常に印象深かった体験談を紹介し、その感想をコメントとして付記している。なお、傍点は筆者による。

1) 人の心を理解するための本質を掴んだ学生

(01 男性)「眼の養成」

この講義を受けて、ビデオの実情が衝撃的だった。と同時に、よく観察する力、つまり「眼と心」を養うものと私は思った。ここで体験したことは、自分にとって物事を多角的に捉えることの難しさと、人を見るためには、行動・状態・心的変化・しぐさ、時によっては、この瞬間はこのような心理だというような推測力が求められ、他の講義ではまず体験できないような貴重な時間だった。

言葉を持たない子どもとその母親の間に生ずる見えない壁、そしてその原因となっている要因の解明、紐解くことは素人である私には非常に難しく、困難なことだと思っていた。

小林先生の講義を受講するのは、今までも何度かあったが、改めてこの講義の特徴は？何を学び考えることができたのか？と考えると、ビデオ・資料を通して自然に物事に対する見方と感じ方、感性が研ぎ澄まされていったように思える。

人によってものの見方、観察の仕方や捉え方は十人十色で、もっと言うならば、言葉を持たない子どもとその親の交流場面をどのように把握するかは非常に難しく、様々な考えがあると思う。そして、その人その人の心理の奥底には、自分が自覚していない無意識的な「もの」があると感じた。それは自分の生い立ちやこれまでの環境に起因するのかもしれないと感じた。他の講義では、あまり口にしたくないが、生徒の受動的な講義がほとんどだ。教授からのテキストやレジュメ、授業そのものが教授から生徒への一方的な講義で、それは形だけの「講義」なのだと思う。ましてや、生徒自身が能動的に考え、自分の気持ち

や見方を体現することなどできてはいない。

しかし、この講義は生徒に考えさせるため、最初は何も指示したり教えたりしない。1回目のビデオを鑑賞した際に、私自身の感性と眼でこう感じたことがあるとする。そして、気づきが深まるように、先生や他の学生たちの着眼点などに着目して、2回目のビデオを見た際に、1回目よりもはるかにそのビデオの本質が見て取れると感じた。この時の気づきの気持ちよさ、そして面白さは他の講義ではなかなか味わえないものである。

過去のビデオでつぎのようなものが印象に残っている。1歳0ヶ月男児の主訴で、泣いてばかりであやしても笑わない。抱きつくとのけぞる。視線が合わない。人見知り激しく人を寄せつかない。真似を全くしない。人見知り激しく、周囲への警戒心が激しい。こういった症状の子である。初回面接では、母親はこの子を赤ちゃんらしく感じたことがないと語っているのが印象的であった。

ビデオは2回見たが、1回目と2回目見たとき、同じものを見たはずなのに、自分が見落としていたものが多く見られ、まるで違うものを見ている気分だった。たしかに一度見たものだから、どういう内容かのアウトラインがあり、固定観念から抜け出すことがなかなか難しかった。しかし、上記に挙げたように、小林先生のヒントで着眼点を変えること、つまり私は一度目は子ども視点で見ていたものを、二度目は母親視点で着目したところ、「気づき」に気づいたのである。

母親は、子どもに対して自分の理想と現実のギャップがあり、それを埋めたいがために、無理をしているような印象だった。ストレンジャーが入室した時も、虚勢や見栄を張るため、露骨に子どもをなでたり、あいさつさせようとしたところは痛々しく思えた。ただの気持ちがかもってない行動にしか見えなかったからだ。つまり、母親は周囲の目が気になっている。そのために子どもとのすれ違いを生んでいる要因の一つではないかと思った。

このようにして、見方を変えるだけで考え方が変わり、知らなかったものが見えてくる。物事を多角的にとらえ、その中にいる人と自分をシクロ・リンクさせることにより、心理的にその人の立場になることで、「こころ」という

ものがわかるのではないだろうか。当たり前のように聞こえるが、実際これはなかなかできるものではないと思う。これも「気づき」の一つであり、この講義における重要な学びである。

1度目のビデオで自分の気づきにとられるのではなく、固定観念から抜け出すため、着眼点を違うものに置き換えていくことが、1度目と2度目の気づきの差異だと思った。

他の講義にも言えることだが、小林先生の講義はビデオを用いる際、必ず1回流すだけでは終わらない。それは小林先生の明確な意図として伝わる。ただ、教えるだけではない。問題の本質を直に見て欲しいから、そして、気づいて欲しいから何回も流し、心と眼の養成を鍛えて促しているのだと思う。実際、講義の初めの方と終わりの方では、着眼点やディテールに対する見方が恐ろしく変化してきたように思え、それは初回とは雲泥の差であると思った。

最後になるが、このような成長するきっかけを与えてくださった講義に、そして小林先生に感謝の気持ちが尽きないと感じている。

<コメント>

着眼点を変えるだけで人間観察の理解が大きく変化していくことを実感する中で、その際の気づきの気持ちよさと面白さを語っている。さらに、観察対象と自分をシンクロ・リンクさせる（重ね合わせる）ことで、その人のこころを理解することが可能になるということを述べている。この指摘は、人が人を理解する際の本質を言い当てていて、素晴らしい気づきであると私は思った。そして、それを阻害する要因として先入観にとられることを挙げている。

私の講義のねらいが的確に届いていることが文章全体から伝わってくる素晴らしい内容である。

2) 人を理解するためにはまず自分を知らなければならないと語る学生

(11 女性)「鏡」

この講義で最初に母子関係の観察を行った際、私は親子の問題にまったく気が付きませんでした。何度かビデオを見ていくうちに小さな違和感に気が付きましたが、その違和感に対するマイナスな部分を感じ取ることができませんでした。その後、他の方たちが書いたレポートを読んで初めて親子の問題を発見す

ることができました。とともに、同じビデオを視聴したとしても、見た人が持つ価値観によって一人ひとり異なった捉え方をすることを改めて実感しました。

この講義で、母子関係の観察を行い、他の方が書いたレポートを読んだり、小林先生の解説をお聞きしたことで、人間観察を行う上での新しい視点を吸収することができました。私は母親によく「あんたは人に興味が無さすぎる」と言われていました。今回ビデオを視聴し、親子の間に生じている問題を見つけるという明確な目的があるにもかかわらず、私はこの親子に対して、肯定も否定もすることなくただ眺めているような感じでした。他人への関心の薄さや、自分中心に物事を考えてしまっていることに気付きました。

これまで受講してきた他の講義でも、教科書や先生が用意された資料などを見て気づいたこと、感じたことを発表するという場面は何度かありました。問題や結果が数値化された視覚的に認識することのできる誌面上の資料などが対象である場合、これまでの学習によって獲得してきた知識の量によって人それぞれ意見は異なると思います。

しかし、小林先生の講義で行った人間観察のような対象が人である場合、実際には自分が体験したことで得た価値観や無意識の中にある自我によって捉え方は変わると思います。つまり、他人のことを理解しようとする際に、まず必要なのは自分を知ることだと考えました。他人に対してどんな感情を抱き、その感情をどう表現しているのか、客観的にそして主観的に、多面から自分のことを知る必要があると思いました。私は他人の表面的な言葉や行動に惑わされやすいという特徴があります。なので、人の言動には表面上に表れない思いが隠されているということを理解し、心に留めておく必要があると感じました。

私たちが所属する社会福祉学科では、対人援助において必要なスキルを身につけることを目標に、日々勉学に励んでいます。もし、社会福祉士として働くことになった場合、様々な悩みや問題を抱えた方と関わることとなります。ご自身の問題を把握し、解決に向けて積極的な方もいらっしゃれば、自分には問題はないと頑なに支援を拒み続ける方もいらっしゃると思います。また、対象者は一人ではなく、その家族や周囲の方など多方面へのアプローチが必要になる

場合がほとんどだと考えられます。

これまで他の講義ではこのような問題を抱えた方（クライアント）と、その家族に対し支援を行うための方法・技術を学んできました。ここでは、クライアントの持っている強みや問題解決能力を引き出し、最大限に活かすための技術を学習しました。

ただ、このような援助技術を勉強したからといって簡単にできるものではありません。私たちの日常生活においていえば、「友達が明らかにいつもと様子が違う」という状況は、その友達のいつもの状況を知らなければキャッチできない情報です。また、他人に悩みを相談するには、そこに信頼関係がなければ難しいと思います。私たち人間の心は常に変化し、良いときも悪いときもあります。私のように喜怒哀楽の差が激しい人もいれば、感情が全く外に出ない人もいます。自分以外の人の感情を正確に読み取り、アプローチしていくためには、この講義で行なった人間観察がとても重要になることを、全体を通して改めて感じました。

小林先生が講義中に、ある学生が「人間観察を行う際には、様々な視点から対象者を捉えられる視点を持つ必要がある」と書いているけれど、結局同じような感想になるとおっしゃっていて、実際私もそうだと思います。自分の中にある価値観は簡単には変えられないと思うし、意識していない幼い頃の経験によって得た無意識の領域には自分自身であっても踏み込むことはなかなか困難だと思っています。ただ、新たな経験を積むことで獲得できる考え方やものの見方・捉え方もあると思います。これから先の自分の経験全てに意味があると思いつつ、日々を過ごしていきたいと思います。また、周りをもっとよく観察し、人の心の動きを理解できるようにしていきたいと思います。

<コメント>

母子関係の観察の難しさをただ感じただけでなく、その背景に自分が他人に対して関心が薄く、自己中心に物事を考える傾向にあることに気づいている。そこから他者を理解するためには、まずは自分を知ることであると語っている。

他者理解は自己理解と深い関係にあることを体験的に語っていることに私は

驚くとともに、彼女がこのような気づきを述べていることに感心させられた。

3) 人間観察を積み重ねる中で変わっていく自分を実感した学生

(12 女性)「新しいものの見方を手に入れることができた半年間」

私は人の心理を見ることや考えることが好きである。そのため1年次に心理学の講義をとっていた。それに比べると、この講義では、実際のビデオを見ながら自分で自由に考え、様々な親子の変わった様子やおかしな所など、違和感を感じる部分を自分の目で見て実感することができた。自分の考えをまとめたうえで、後から先生が解説をしてくれて、自分では気づかなかった点や面白い点に気づくことができ、とても頭に入ってきた。やはり、「百聞は一見に如かず」ということわざは本当なのだ実感した。長々と文章を読むことより、実物を見たほうが本当にわかりやすかったし、教科書には載っていない細かな動作やリアルな行動が見れて面白かった。

何組かの親子の関係を見た。このように実際の親子を講義の題材として使う講義は受講したことがなかったので、初めはびっくりしたけれど、毎回毎回見るうちに段々と自分の考え方が変わっていることや、思考の範囲が広がっていることが実感できた。そのことは自分にとってもとても良いことだと思うし、将来、社会福祉士になった時に、とても役立つと強く思った。

この講義を受講して、子どもへの新しい観察力がとても身についた。本当は大好きなはずの母親に対して意地を張って甘えなかったり、甘えたいけどなぜか甘えることができなかったり、母親の前でわざとクライアントと仲良くしたり、母親に「あれ取って」と指を指すが、「ちがう、ちがう」と何度も繰り返して母親の行動を見ている、といった様々な子どもがいるということを知ることができた。一見普通の親子に見えていたけど、先生の解説を聞いた後にもう一度同じ親子を見ると、まったく違う親子のように見えたこともあった。子どもは小さい頃の環境次第で大きくなった時の性格がきまってしまう。ということは、これまで見てきた子どもたちは大きくなった時に、友達関係や人間関係を築いていくうえで何かしらの支障が出てくるのではないかと思った。人とコミュニケーションが上手くとれなかったり、自己中心的な考え方になったりと、いじめの対象にもなってしまうのではないかと思った。

私は今年の夏に社会福祉実習がある。実習先がこの間発表され、私は児童養護施設に行くことになった。そこで思ったのが、この講義で学んだことが役に立つ、活かせると思った。児童養護施設は、両親のいない子どもや、今までに親から虐待を受けていた子ども、親はいるが環境の問題で一緒に住むことができない子ども、平日は施設で暮らし、週末は家に帰る子どもなど、様々な環境の子どもが集まって暮らしている。この子どもたちに共通していることは「親からの愛情が足りていない」ということだと考える。通常であれば一緒に暮らし、両親から愛情を感じながら育っていくが、施設ではたくさんの他の子どもがいるし、施設の職員さんは子ども一人に一人ずつというわけにもいかないのので、施設の子もたちは常に「相手にされたい」「構ってほしい」「職員さんを独り占めしたい」と思っていると思う。

そんな子どもたちに対して私は実習の時、どのように接すれば良いのかと考えた時に、この講義で学んできたように、子どもの行動をよく観察して、その子どもがいま何をして欲しいのか、何を考えているのかをよく観察したいと思う。子どもの気持ちを理解し、子どもたちが少しでも「自分を理解してくれる人だ」と私のことを思ってくれるように得た知識を活かしたい。

またこの講義は自分の将来のことも考えさせられた。自分が結婚して子どもを産んでから子育てをする時に、事例の親子のような関係になっていたらどうしようとか、自分はどのような母親になっているのだろうかなど、改めて自分の母親像を考えさせられる講義であった。いまでは街中で小さな子どもを連れた母親などを見ると、「この親子は良い関係が築けているのだろうか」、「この母親は赤ちゃんのことを理解してあげているのだろうか」など、様々な考え事をするようになった。電車などで親子を観察していると、「この母親はただ怒鳴りつけているだけだな」とか「この母親はきちんと自分の子どもの性格をわかっているな」という場面に出会う。このような考え方ができるのはこの講義を受講したからであって、もし受講していなければ、このような考え方は私には身に付いていなかったかもしれない。そう思うと、本当に受講して良かったと思った。

<コメント>

実際には違和感を感じ取ったとしても、それを言葉にすることに対するためらいが強い学生が多い中で、この学生も自分の目で確かめつつ、私の解説によって新たに面白い点に気づけたことがとても大きな喜びになっている内容である。そして、次第に自分のものの見方や考え方が広がり、変わっていくことを実感したことが語られている。全体を通してそんな変化する自分への大きな喜びが伝わってくる内容でもある。

4) 福祉に対する固定観念から脱出できた学生

(13 女性)「ありのままの私」

私は、この講義を受講して、福祉に対する見方が変化した気がする。そのように感じた点は二つあった。

一つ目は、この講義で自分自身の視野が広がった点だ。この講義ではビデオを視聴したり、先生の話の聞いたりする講義が多かった。また、それに対して自分の意見や感想を述べた。先生から、授業中に子どもたちや母親の行動に注意すべき点をいくつも教わった。その中で私は目先のことばかりにとらわれて、周りの細かい所まで注意や観察力が行き届いていないと感じた。子どもだけ、母親だけの行動に目を向けがちで、両者の行動に注意と観察力が行き届いていなかった。特に私は思い込みが激しくて、「子どもが母親に甘えるのは当然のことだ」「母親が子どもを撫でるのは愛情表現だ」といったような私自身の思い込みに左右されがちだった。だから、先生から「この映像の、このような所に目を向けなさい」「このような所を見るべきだ」と指示があった時、私は1年間と半年以上福祉のことを学んできたのに福祉の形にだけとらわれて中身まできちんと理解することができていないと感じた。先生の授業を受けていく中で、段々と自分の視野が広がっていき、私の中でも福祉の考え方や見方が変化してきたように思えたし、今まで気づけなかった視野(領域)にも目を向けることができたと思う。それは、先生の講義を通して自分自身が変化したからだと思うし、先生のご指導のおかげで変わったのだと思った。

2つ目は、固定化された福祉から脱出できたのではないかと感じた点だ。1年生の時から福祉の授業を受講してきたが、ほとんどの先生方には教科書が用

意されており、教科書に沿った授業のものばかりだった。だから私は教科書に書かれている内容ばかりに目を向けがちだった。しかし、先生の授業ではパワーポイントなどを使うこともなく、生徒が取り組みやすい授業だったと思う。生徒自身の考えや率直な気持ちをプリントに記述させた。だから自分が思ったまま素直な気持ちを書き表現することができた。そのおかげで私自身も、教科書や資料などのようなかまごまった表現から殻を破ることができた気がする。自分の思ったことや素直に感じたことも率直に述べることができたと思うし、それにより福祉の見方や表現なども変わり、大きく福祉に対する考え方が変わったと思う。

この講義を受けて、福祉って本当はこういうものなのだなと思ったし、福祉の奥深くまで理解できたかもしれない。

最初は社会福祉士になりたくて大学に入学し、福祉に携わる仕事が本当にできるのかなと感じていた。しかし、先生の授業を受けて、もう一度、福祉に携わる仕事に興味を持ったし、福祉職に興味を持った。

最後に、この講義を受けて、様々な子どもたちや母親を見てきた。子どもは、本当は母親に甘えたいのに、母親が子どもの気持ちに気づかずすれ違う親子や、愛情表現と思って子どもにたくさん注意を向けていたが、なかなかうまくいかない親子など、世の中にはたくさんの悩みや不安を抱え立ち向かい、時には悩み、時には苦しみ、様々な試練を乗り越えているのだと思った。

もしかしたら、私たちも小さいころ両親にたくさん迷惑をかけてきたのかもしれない。実際、私は身体中にアトピーがあり、女の子であることから母にたくさん心配をかけていたようだ。大きくなって身体中にアトピーがあったら周りの子に嫌がられたり、いじめられたりするのではないかといったような不安があり、両親は本や病院を探して、私を一生懸命育ててくれた。おかげで、アトピーは完治したし、今こうして健康に毎日過ごすことができている。今、このレポートを書いている私だが、インフルエンザA型にかかっており、一人暮らしの私に母親が心配して「家に看病しに行こうか」「仕事は休めるから」と自分のことより私のことを心配してくれている。二十歳になり成人式も迎え、大人の仲間入りをしたばかりなのに、たくさん迷惑をかけている。いつま

で立っても親にたくさん迷惑をかけてしまっている。私が結婚して母親になった時、私もお母さんみたいになれるのか心配である。自分のことで精一杯なのに周りのことまで目を向けられるか心配だ。

しかし、私は先生の授業を受けて少し視野が広がったし、少しだけ自分の意志をしっかり持てるようになった気がする。これからの人生、大学を卒業して社会に足を踏み入れたら、いまよりもっとたくさんの試練や困難なことが待っていると思う。そんな時、大学で学んだことをしっかり活かし、周りのことまで見渡し手助けできるような大人になりたいと思う。この講義で「ありのままの私でいいのだ」「別に着飾らなくていいのだ」ということを学んだ。ありのままの自分でこれからの人生をしっかりと歩いて行こうと思った。それは、この講義を受けて学んだことだし、自分の気持ちに変化があったからだと思った。先生の授業を受けて、自分自身が少しでも変化できて本当によかった。

<コメント>

自分の思い込みの激しさに気づくとともに、そうしたとらわれから自由になることによって、今まで気づかなかったことに目を向けることができるようになったことが力説されている。そのことによって今までの福祉に関する自分の固定化されたイメージから脱出することができた喜びが伝わってくる内容である。そして、「ありのままの私でいいのだ」「別に着飾らなくていいのだ」ということを学んだ、と力強く述べられている。

5) 自分の生い立ちから自己理解が深まり、人間関係の大切さに気づいた学生 (14 女性)「自分自身とも向き合っていく」

はじめに

私にとってこの講義での体験は、人の気持ちを汲み取ることの難しさや大切さについて考えさせられるとても有意義なものだった。

そもそも私は、人間観察を行った経験が少なく、人の気持ちを汲み取る努力もあまりしてこなかったように感じる。だから、自分の生い立ちを振り返り、どういった経緯で今の自分の価値観や見方や捉え方が形成されたのかを考えていくのと同時に、今後どのように人間観察力をつけていきたいかについて考えていきたいと思う。

自分の生い立ち

ちょうど講義で見た録画ビデオに登場してくる子どもたちと同じ頃の年に、自分がどのような子どもだったか、母親に聞いてみた。すると「とても物静かで、まったくと言っていいほど言葉を発さなかったから、とても心配していたのよ」と言われた。それから私は、中学時代や高校時代に、人前で話すことが好きになり、様々な経験をさせてもらった。そして、友人付き合いも、自然と周りに人が寄ってきてくれていたので、友人関係でのトラブルもなかったし、そもそも、人間関係についてあまり興味を持っていなかった、と思う。

しかし、大学に入り、対人援助職についての勉強をしてしたり、母子関係を観察したりすることで、人間関係の大切さについて気づくと同時に、その大変さについても理解することができた。もし、この講義での学びがなければ、机上だけの勉強にとどまり、その奥にある大切なものに気づくことができなかったと思う。人間関係は、その人の人格や価値観を形成する大きな要因の一つであり、生きていく上での基盤である、と思う。だからこそ、この基盤をしっかり固めていくことが重要であり、それがその人にとっての心のよりどころとなり、安心できる場所でなくてはならない、と考える。

講義を受けての感想

母子関係の観察は、言葉のない母子交流場面だったため、場の空気を読み取ったり、行動やしぐさから心を読み取ったりする、ということが難しかった。一方で、録画ビデオを見れば見るほど、母子関係を見て胸が痛くなるような気持ちになっていった。私は、家族や友人にとっても恵まれていたため、今まで悩むこともなかったし、自分の思いを正直にぶつけても受け止めてくれる、という安心感があつた。しかし、録画ビデオの母子たちは、お互いにそれぞれ抱えている気持ちがあり、その気持ちをまっすぐに伝えることが難しい様子で、とても歯がゆい気持ちになった。しかし一方で、「愛して欲しい」という気持ちを、不器用ながらもしっかりと伝えようとしている場面も数多く見られた。私は自分の気持ちを伝えるための話し言葉を持たない乳幼児が必死に伝えようとしているシーンを見て、とても感慨深い気持ちになった。私は、誰かに「愛してほしい」と思わずとも、周りに人が寄ってきてくれてたくさんの人が愛して

くれていたため、自分から「愛してほしい」と思うことがなかったからだ。だから、今でも、もし自分の周りに人が寄ってこなくなってしまうたら、自分は どうやって「愛してほしい」という気持ちを伝えればいいのかわからずに、立ち止まって考え込んでしまうのではないかと、思う。今まで人間関係で苦勞してこなかったことは、一見運がいいように思えるが、今となって考えてみれば、とてもまずいことではないかと、思う。なぜなら、将来、社会福祉の現場で働くときに、相談者の心を十分に汲み取ることができずに、相手の心に寄り添うことができない。ということにつながってしまうのではないかと感じるからだ。だからこそ、今回の録画ビデオは、改めて人間関係の大変さや大切さについて考えるきっかけになったし、社会には母子関係において悩みを抱えている人たちがたくさんいる、という気づきにもつながった。そして、自分のように友人や家族に大切にしてもらいながら育った、ということは、決して当たり前のことではなく、とても貴重なことであり、もっと周りに感謝すべきだと反省した。

今後について

この講義で得た学びを今後生かすために、ボランティアなどを通して、たくさんの人たちの交流を大事にしていきたい、と考える。他の講義では、教科書やテキストをメインとした授業展開であるが、この講義では、実際に母子関係の観察を経験することで様々な気づきを得る。学問対象が人であるため、一筋縄で解決することができないのが、社会福祉の学問に共通することである、と考える。だから、この講義で学習したことは、とても実践的で、母子関係について学ぶだけでなく、自分とも向き合うことができる貴重な経験となった。だから、今後もたくさんの人と交流をしながら、目の前の人たちと接すると同時に、自分自身も成長していきながら、たくさんの人々の気持ちに寄り添い、支えていきたい、と思う。

<コメント>

感性教育で私が学生に常々勧めていることではあるが、乳幼児期の母子関係の観察をきっかけに、自分の幼少期はどうだったのだろうかとの学生は母親に尋ねている。このように自分の興味や関心に沿って素直に行動する学生の姿

が思い浮かぶが、彼女は講義を通して、人間関係への興味が強まり、人間関係の表面的な観察では掴み取れない大切なものがその奥にあることに気づいたという。それは自分と向き合うことによって初めて得られた体験であることが語られている。

6) 先入観にとらわれていた自分に気づき、他者の意見から学ぶ喜びを語る学生

(23 男性)「自分の経験からくる先入観とみんなの意見」

私がこの講義を通して新たに感じたことは3つある。

まず一つ目は、自分が思っている以上に今までの経験からくる先入観にとらわれているところだ。私は最初の映像を見たときに親子の関係に違和感を感じたが、それがどんなものかわからずに、最終的には普通の親子と断定してしまった。赤ちゃんは母親がいなくなれば普通に泣くし、母親も普通に赤ちゃんにしっかり気を使っているように感じたからである。

しかし、自分の意見を書いてみんなの意見を聞いてみると、母親は気を使っているというより何をしたらいいのかわからないのではないかという意見があって、確かにその意見の後に映像を見ると、気の使い方が他人に対する接し方のように感じました。

その時に先生が言っていた、経験にとらわれている先入観によってだいたいなところを見逃しているという言葉に私はすごく感銘を受けました。確かに私は最初、何気なく見ている映像から読み取れたことは自分が子どものころに育ててもらっている経験から赤ちゃんの泣き方は普通の泣き方と変わらないと断定してしまい、赤ちゃんの気持ちの部分への配慮が少し欠けていたなとすごく感じました。1回目のみんなや先生の意見を踏まえてみると、母親が赤ちゃんを撫でている所がまるでベットの撫でているように感じ、赤ちゃんに遊ぶように促したかと思えば、周りの物は崩さないでと遊び方まで強制しているのではないかと感じた。実際にここでこういう思いを本当は感じているのかと意識して次の映像を見てみると、赤ちゃんが母親に抱っこをしてもらおうときに拒絶しているところから、母親に甘えられない状態にあると推測できるようになり、とても面白く奥深い学問であり、社会福祉士にとって大事なものだと感じました。

2つ目に私が感じたことは、実際にあった事例を映像で見られるのはとても勉強になるということだ。授業の単語を覚えても、この授業で見たようにいざ観察してみると気づかない点が出てきており、覚えた単語を使う暇など無いと感じた。このことを知れてとてもよかったと感じた。

3つめは、他の講義と違いみんなの意見がよくわかり自分の考えをもっと深めることができると感じた。自分一人ではわからない点も知れてとても勉強になったからだ。

この3つから私は、この講義を通して新しい観点や経験からの先入観というものを知れてよかったと思った。そして私は、この講義で学んだことをこれからの自分の人生につなげていき、困っている人の助けになれるように頑張っていきたいと改めて感じることでよかった。

<コメント>

自分の先入観の強さに気づくとともに、他者の見方、考え方を知ることによって自分に新たな気づきが生まれたことを驚きをもって語っているところが印象深い。

7) 違和感を言葉にすることへのためらいから脱し、自分の思うままに語る大切さを語る学生

(24 女性)「自分の感じたことを大切に」

この講義で観察する際、最初の頃の私は客観的に公平に見ようということばかり考えていて、それでも結局は自分の独自の感覚が観察の中に現れてしまうことをあまりよくないことだと思っていた。しかし、先生が自由に感じるままに述べなさいということをおっしゃっていたためその通りにしてみると、今まで知らなかった自分を見出すことができた。例えば、私は母親の視点に立って観察をしがちであり、子どもが何を考えているのかを予想することが苦手であること、自分が幼い頃人見知りがあったため、不自然な行動をする子どもに違和感を覚えることが少ないということなど、観察における自分の傾向が次第にわかってきた。そこで気づいたことを次の観察にも生かすことができるため、授業のうちでは自分の思うままに述べるのが大切だということがわかった。また、私は自分の感じたことをうまく言葉にすることが苦手な傾向

にあると感じていて、最初の頃の観察では、違和感を感じたことがあるにも関わらず、言葉に表すことをためらってしまっていた。しかし、観察の回数を重ねるにつれて、それが訓練となり、次第に頭の中を整理しながら述べたいことを述べることができるようになった。

ほかの講義では新しいことを頭に入れるばかりで、興味深い内容ではあるが、少し飽きを感じていた。その一方、この講義では、専門職に必須であろう観察力の訓練ができたということだけでなく、自分という人間を再認識することができ、毎回の講義で得たものは大きかった。先生が自分の感じるままに述べなさいとおっしゃるのは、今まで自分が培ってきた考えや感覚、そしてそれの元となったであろう様々な経験を大切にいなさいということなのではないかと考えた。

<コメント>

この学生にとって「客観性」という言葉に強いとらわれがあり、そのため人物観察をする際に、自分の感じたことを込めてはいけないという思いが強かったことがよくわかる。自分の思うままに語ることによって、これまで知らなかった自分を発見することによって、自分という人間を再認識することができるとともに、自分のこれまでの経験を大切にすることを学んだという。

8) 自分の無意識に気づくことの喜びを語る学生

(29 女性)「無意識を意識する」

はじめに、わたしがこの授業を通してどのようなことを学び考えるようになったのかを述べていき、次にこの授業にあってほかの授業になかったものとは何か、最後に今後どのようにしてこの授業で学んだことを生かしていけるかについて述べていきたいと思います。

この授業での学び

この授業を通して一番自分で以前とは変わったと思うのは、「無意識を意識できるように心がけるようになった」というところです。無意識を意識してしまえばそれはもう無意識とは言わないのかもしれませんが、自分が普段見えていなかったような考えに自分自身で気づけるようになることの面白さを感じられるようになりました。物事を観察することにおいて、自分が無意識のうちに

気づきたくないものについて避けていたり、逆にどうしても意識してしまってそればかりが気になってしまう部分があることに気づけたし、まだまだ自分の知らないところにそのような部分があるのだらうと思えるようになりました。また、自分は人の意見に影響されやすいところや、自分の中で自分の意見に反論しながら延々と考え込んでしまい、はっきりとした意見が言えなかったり、判断が遅くなってしまうところがあります。でもそれは決して悪いことなどではなく、そうすることで自分の中の無意識を探り、より深くて自分らしい考えに至れるのだということを学びました。

ほかの講義の学びとの違い

この授業にあってほかの授業になかったものとしてはまず「自分のことをみつめなおす機会」があると思います。先生は授業において生徒の感想を述べさせるたびに「自由に、感じたままのことを述べるようにしてほしい」ということを強調していました。

最近の学生は自分自身の意見を述べないだとか、自分の考えを持っていないのかとかいう意見をこれまで頻繁に聞いてきました。しかし、それは「述べない」のではなく「述べたくても述べられない」ものだったのだと思います。なるべく正解に近くて周りのみんなと同じような意見を述べておけば、だれにも叱られないし、笑われないし、楽だからという考えの学生が増えてしまい、そのような意見を言われるようになってしまったのだらうと考えます。こんな考えをする学生が増えてしまったのも問題ですが、なぜそうってしまったのか、こんな状況をどうすれば抜け出せるのかについて真剣に向き合って考える授業はこれがはじめてだったように思います。また、たまに授業の中で自分たちの意見を先生がどう受け止めてくれているのかを聞ける機会があったことで、自分自身の考えを聞いた相手がどのように感じて、それに対してどのような意見を持ってくれているのかを知ることができたのも良い経験であったと思います。

今後へ向けて

私たちは今後、普通の大学生生活はもちろんアルバイトや実習、就職活動などさまざまな人々と関わる機会を持っています。その関わりの中で、相手との

関係をうまく保つための手段として、この授業での学びを大いに役立てたいです。

それに加えて、自分自身を深く見つめなおすための方法としても役に立つと思うので、ここで学んだことを生かして自分が本当にやりたいこと、言いたいことをきちんと表現できるようになりたいと思えるようになりました。

<コメント>

「自分が普段見えていなかったような考えに自分自身で気づけるようになることの面白さ」を実感するとともに、これまでの自分を振り返って、「人の意見に影響されやすいところや、自分の中で自分の意見に反論しながら延々と考え込んでしまい、はっきりとした意見が言えなかったり、判断が遅くなってしまふところ」に気づいている。つまり、自分の中の矛盾したところに気づいているということである。しかし、ここでこの学生の素晴らしいところは、そんな自分を単純に否定的に捉えるのではなく、そこから自分の無意識を探ることによって、より深い考えが生まれるのだ、と深い洞察を述べている。

以上、この学生が述べていることは、私がこの講義でもっとも高い目標に置いているもので、このようにずばり的確に自分の言葉で述べていることに、私は深い感動を覚えた。

それにしても「無意識を意識する」というタイトルは素晴らしい。私がこの母子観察から得た最大の収穫がまさにそこにあったからである。

それとともに、これまでよく指摘されてきた「この頃の若者は自分の意見を持たない」との批判に対して、鋭い反論を述べるとともに、大学での教育に対して強い反省を促している。

9) 深い自己洞察によって自分自身の考えに自信を持てる感覚を知った学生 (36 女性)「きっかけ」

この講義を受けたことは、自分自身を見つめなおす良い機会となった。

私は今まで、小学校、中学校、高校と答えがあらかじめ用意された問題を数多く解いてきた。それまでは気づかなかったが、いつの間にか答えを導き出す癖を身に付けていた。おそらく私の周りの人たちも同じであるだろう。しかし、大学生となり、社会福祉を学ぶようになってからは、答えを用意されていない

問題を提示されることがほとんどになった。私自身、答えを導き出すことしかしてこなかったため、考えることがとても難しく、苦手だった数学の難しい問題を解くことよりも難しかった。そして、私は今まで一つの答えを導き出すことしかしてこなかったんだと思い知らされた。今まで私は学力的にみると、一般的に言われる頭の良い部類だと思っていた。しかし、答えがない問題に対しては周りの人たちよりも弱いことがわかった。それは、自分の今までの生育歴に関係するのではないかと考える。

私は人よりも努力しないと人並みに勉強することが出来ない子どもだった。それは今でも変わらない。私は小学校の頃からいわゆる「真面目な子」であった。宿題もちゃんとし、忘れ物もしない、先生から怒られることもない、友達とも仲良く遊ぶ子だった。外では人見知りする子どもだった。しかし、家に帰ると末っ子という立場もあったため、お母さんが大好きな子であった。年の離れた兄と姉がおり、そのこともあり、かなりの甘えん坊であった。当時は分からなかったが、私は何でも家族に「なんで？なんで？」と聞く子どもであったようだ。親や兄たちは「自分で調べなさい」と言っていたそうだが、それでも私は何度も「なんで？なんで？」と事あるごとに言っていたようだ。私はこのことが考えることが苦手になった原因であると考えている。

甘えん坊であるがゆえに、考えることにも誰かに甘えていた。「自分が聞けば、誰かが教えてくれる」と無意識に思っていたのだろう。それが残ったまま成長していった私は、小学校、中学校、高校と、分からない問題、少し考えても分からない問題は「自分の力で解く」ことはせずに、すぐに友達や先生に質問していた。当時の私は「分からない問題はいつまで経ってもわからないんだから、誰かに聞いて解決した方がいい」と考えていた。

しかし、今になって、この講義を受けて、感じたことがある。私の兄は福岡市で一番偏差値の高い高校に進学し、部活をしながらも現役で九州大学に進学し、世間で言われる「いいところ」に就職した。そのような結果になったのは、兄の努力の成果であると思う。そして、兄は自分で考えるということは無意識のうちにしていたからだとも思う。

その理由は兄の学生時代に遡る。兄は私と同じで「真面目な子」であった。

努力を惜しまない子だった。しかし、私とは違い「親に甘える」ということをあまりしない子どもだったと母は言う。兄は長男で、下には年の離れた妹二人いる。そして、中学生になるまで転校を数多くしてきた。兄は辛い思いを沢山してきた。そのこともあり、兄はとても強い子どもになったようだ。また、私は中学生の時も高校生の時も親から勧められた学校に合格することを目標に頑張ってきた。しかし、兄は親に相談することなく、受験校を前もって自分自身で決め、宣言通りその学校に合格した。就職のときも同じだった。私は兄と全く異なる道を生きてきた。つまり、自分で考えることなく成長してしまった。

この講義を受けるまでにはこのことに全く気づかされなかった。私はこの講義を受け、考えることに対して頭を使うことで自分を見つめ直すきっかけになった。自分の考えをまとめ、先生や他のクラスメイトの考えを聞き、また考え直すことで私が今までしてこなかった「考える」ということに頭を使うことが出来たからだ。今までは自分の考えをまとめることや述べるのがとても苦手だった。しかし、この授業を受けたことで、他の授業の中でも自分なりの考えを持ちながら講義に臨めることが多くなったように感じる。

初めこの授業は自分にとって訳の分からない授業であった。自分の考えたことに自信が持てず、答えを提示されずに毎回の授業が終わる。しかし、何回か授業を受け、親子の動画を観察し、先生の解説を聞いていると、先生の考えを含めた私自身の新たな考えが出てきた時があった。その時に、「これが自分自身の考え、答えなのだ」となんとなく感じる事が出来た。今でもまだ自分自身の答えや考えに自信が持てない時が数多くある。しかし、自分自身の考えに自信が持てる感覚を知った今は、「諦めずに考えることの重要性」に気づけたため、あなたの考えを述べなさい、という問いを与えられた時には中途半端ではなく、自信が持てるような答えを述べるようにすることをとても心がけるようになった。私はこの授業を受けて、社会福祉士になるための力を身につけられたとは感じなかったが、自分自身を見つめなおすとても良いきっかけになった。

<コメント>

これまで自分の中に、いかに正解を導き出すことばかり考えてきたか、そう

したとらわれに気づいている。この講義が自分自身を見つめ直す機会となったからだという。自分が子ども時代にどんな子どもだったかを振り返るなかで、いかに周りの期待に応えることを良しとして生きてきたかに気づいている。

そしてこの講義の中で、自分の思ったことを正直に述べる課題を経験することによって、次第に自分自身の考えに自信が持てる感覚を知ったという。

10) 自分の先入観に気づき、感受性が豊かになり、新たな気づきの喜びを語る 学生

(38 女性)「新たな発見に出会えた授業」

この講義で、私はあらゆる視点に着目する力を身につけることができたと思う。他の授業とは違い、ビデオを視聴し、自らの意見を感じたままに自由に感想を書くことが主な授業であった。また、その書いた意見を共有し、多くの視点から物事を考えた。

最初のビデオの視聴の時は、普通の子どもにしか見えず、「間違っている行動はない」と思ったことばかり目につき、注意深く観察することができていなかった。親子関係の距離感にも全く気づくことができなかった。子どもがボールや遊具で遊んでいるのを母親は見守っている映像だと思った。ストレンジャーが部屋に入ってくると、子どもは人見知りかのようにじっと顔を見つめるのもいたって普通の行動だと思っていた。しかし、先生の解説を聞くと、親子関係のあらゆるところに距離感があることがわかった。また、子どもばかりに目を向け、母親の行動までは感じ取ることができていなかった。全体的に目を向けるのではなく、一つの点ばかりにとらわれていた。しかし、先生の解説や授業回数が増えていくうちに新たに気づくことが増えていった。先生が、子どもの仕草や行動、表情をわかりやすく映像とともに解説した後に、もう一度ビデオを視聴すると「なるほどな」「確かにそうだな」と感じる部分が多くなった。

例えば、子どもの遊んでいる姿をビデオで視聴した。その際、子どもはずっと一人で遊び、母親と一緒に遊ぼうとして子どもに近寄っても、一緒に遊ぼうとしていなかった。子どもは素気なく無視するような態度であったことを鮮明に覚えている。このような態度を最初は、気づくことなく目にも止まらな

かった。

また、母親が子どもを抱っこした時の解説も心に残っている。子どもは、抱っこをされている時も母親とは目を合わすのを避けている。抱っこをされても指をくわえ落ちていないことから、このような行動をとるなどの解説を聞いたときに、そのような考えもあるのだと思った。子どもにとって、指をくわえるのは癖だと思っていたが、答えは違っていた。次に先生は母親に視点を置いた。私は子どもにばかり目を向けていたため、「普通の母親だな」としか感じていなかった。しかし、解説は予想もしなかったものだった。先生は「母親が子どもを避けている行動が見られる」と解説した。このような行動が母親から読み取れるのだと驚いた。私は、細かいところまで目を向けていないことに気が付いた。また先生は、親子関係には関係ないストレンジャーに注目していた。授業回数が増えるとともに、自分で細かいところまで気がつくようになり、新しい発想を生み出すことができるようになった。子どもだけではなく、母親やストレンジャーの心情にも考察できるようになった。そのため、授業に対する楽しみや喜びも増していった。

この講義は、他の講義とは違い、感受性を豊かにする授業だと思う。大学の講義といえば、今まで習ったことを生かし、新たなことを身につけるものだと思っていた。しかし、それだけでは新しい何かを発見することは不可能だと知ることができた。他の講義では身につけることのできない感受性を養うことができたと思う。まだ考える上で、いつもとは違う考え方をすることも大切だ。そうすることで、新たな発見を生み出すことができるのだと感じた。他の人の意見も聞き入れることで、次の授業の視点をおく場所も増えていき、色々な点に着目することができるようになった。最初のビデオを視聴した時よりも、気がつく点が増えていった。一つの点にとらわれず、全体的に目を向けることができるようになった。また、自分の足りない力を知ることができた。それは物事を考える柔軟性が欠けていることだ。この講義を受講したことで、私は物事を考える際に先入観にとらわれ過ぎていたことに気がつくことができた。これからソーシャルワークに携わる上でこのように考える機会は多くあると考える。その際、一人の人に着目するのではなく、全体的に着目し、観察するべき

だと思う。子どもや母親、ストレンジャーの心情や行動を注意深く見る必要性があると感じた。自分の意見も尊重しつつ、他人の意見も聞き入れることで見方が変わり、新しい考え方が生まれることを学べた。関係性も深く知ることができた。自分の感受性や注意力の向上につながる良い授業となった。これから他の授業で、このような映像を見ての自分の感想を述べる機会があるかもしれない。その時に、今回の経験と知識を生かして、多くの発想力を卒業するまでに身につけることが大きな自信に繋がると考える。

この講義は、自分自身に役立つことが多くあった。これから結婚し、子どもを持つことになるかもしれない。その際、子どもの行動が「おかしい」「変だな」と気づける行動を知ることができた。また、子どもとのコミュニケーションのとりかたを学んだ。この学んだことは将来役に立つと思う。

<コメント>

人間観察の難しさを経験するなかで、次第に細かな点について気づくことができるようになり、それが自分の新たな発想につながることを実感し、それが喜びとなっていることが率直に述べられている。こうして感受性が豊かになることが新たな発見につながるのだと明確に述べているところにこの学生の喜びが伝わってくる。

11) 本当の自分に向き合わなければならない心動かされる体験だったと語る学生
(42 女性)「素直とは」

授業の感想

この講義で行われたような母子のビデオを見て人間観察をし、とらえた特徴や気づきを自由に記述するという授業は初めてだった。だから最初は戸惑い、すぐに書き出すことができなかった。単に人間観察といっても、母子のどこに注目して観察すれば良いかわからなかった。それに加えて自由記述であったため、何を考えて何を書けばよいという答えが見つからず難しいと感じた。“自由記述”と聞くと簡単そうに感じるが、方向性が定まらない分簡単ではないと思った。

自分で母子の特徴をつかむのは難しいが、先生の解説を聞くと母子の関係が手に取るようにはっきりとわかった。母親に素直に甘えることのできない子ども

も、子どもとの関わり方がつかめない親の姿はあまりにも痛ましく、むなしい気持ちになった。1歳ぐらいの幼い頃に、母親と健全な関係を持つことができない子どもは大人になって社会とどのように関わっていくのだろうかと不安に感じた。

きちんと話すこともできなくても、子どもの気持ちを理解しようと努め、尊重する大人の存在は必要であると強く感じた。そして、それが子どもの両親であることがもっともよいことであると思う。将来私の子どもができたなら、この授業で学んだことを思い出して子どもとの関わりを大切にしていこうと思う。

他の講義との比較、この講義の特徴

この講義では他の生徒や先輩の感想・意見を聞くことができる。同じビデオを見ていても、他の生徒の感想は自分と違った視点から書かれていた。とても率直でかつ論理的ですごいと思った。彼らは自身の思うことをふさわしい言葉でしっかりと述べていた。そんな彼らの感想に刺激を受けて、私も素直に思ったことを書いてみようと思うことができた。

けれども、私は何が素直で何が素直な気持ちであるかわからなかった。何度自問自答してもわからなかった。素直に自分の気持ちがわかる人が羨ましいと強く思った。素直になるためには、これまでの人生で築き上げてきた偽りの自分ではなく、本当の自分と向き合わなければならないと思う。それがどれほど難しいことであるかは計り知れないし、完全に素直になることは不可能なのではないかとさえ思ってしまう。きっといくら探しても見つかるものではないだろう。頭で考えるのではなく、落ち着いた気持ちで心を感じる必要があると思った。

他の講義には、本当の自分に向き合わなければならないという時はない。授業の形式としては、パワーポイントや板書をノートに書きながら先生の話を書くというものである。自分の想いや考えなどに触れない授業も少なくない。先生の一方的な話を聞くことがほとんどであるから楽といえば楽であるが、この授業のように心を動かされることはあまりない。

このこの授業を通して、私が得た学びは大きかったと感じる。他者の人間観察を行うことによって、自身の他者における着目点、無意識の考え方や感じ方

が露わになるということを知ることができた。これはとても興味深く面白いことであると思った。自分と向き合う機会を与えてくれたこの講義に感謝したいと思う。

人間観察をすることで、生育歴と現在のつながりの強さを知ることができた。できるならば、タイムスリップして自分が赤ちゃんの時、母とどのような関わりをしていたのか、観察してみたい。そして、さらに自己理解を深めたいと考える。

<コメント>

この学生の内容でもっとも心動かされるのは、「私は何が素直で何が素直な気持ちであるかわからなかった」というところである。そのためには「本当の自分と向き合わなければならないと思う」とまで語っている。それは彼女にとって大変なことであるとは感じつつも、「他者の人間観察を行うことによって、自身の他者における着目点、無意識の考え方や感じ方が露わになるということを知ることができた」ことを率直に述べていて心強い。

12) 感じたことを言葉にするために大切なことに気づいた学生

(45 女性)「比較して私を振り返る」

他の講義と比較して

社会福祉学科の講義では理論を学び、用語を覚え、制度の仕組みを知り、ケースに応じて考えることをする。自分の考えを述べなさいと指示されても、その理論の中で考えなければならないのである。ソーシャルワーカーは自分でどうやってクライアントとラポール形成をするか、その人に応じて考えなければならないが、それも倫理綱領という枠組みの中で考え、意図的に行動しなければならない。言い換えると、ある程度自分自身で思考の制限をするべきなのではないかと考える。しかし、この授業では新奇場面法の映像を見て純粋にどう思ったのか、ありのままに考えたことを書き、他の人の考えを授業内で共有してさらに自分の視点の持ち方、ものの見方、解釈の仕方の引き出しを増やすことができたと考える。

ありのままに書く難しさ

しかし、ありのままに考えたことを書くということは難しいことである。理

由は2点ある。

一つ目は、感じ取ったことを言語化することが難しいことである。感じ取ったことというのは、感覚的なものである場合が多い。「この親子は何かがおかしい」ということを思ったとして、その「何か」をうまく言語化することが難しいのである。

授業を重ねていくにつれて、何かを言語化するためには、まず「誰の」「どの行動」に違和感を覚えたのか、それに対して自分は「どんな気持ちになったのか」という点に着目すれば、ある程度言語化することができることに気づいた。

なぜそれに気づけたのかというと、他の人の考えや考察を共有する機会があり、色々な人のものの見方に触れ、なぜそのような視点を持てたのか疑問に思い、その人が何に注目したのかを探したからである。それによって私は少しずつ違和感を言語化できるようになり、新奇場面法を視聴後、どう感じたか書くことができるようになっただけでなく、人と話をする際に、なぜ自分がこのような感情を抱いたのか、そう思ったのかということ言語化できるようになった。

2つ目は、そこに人間関係があるからである。例えば、芸能人のスキャンダルに関して人々は自分の考えを述べている。それはその芸能人と関わりがない、また薄いからであると私は考える。もし、それが友人だった場合、本人に伝わったり、誤解されたり、揉めたりするのを避けるために思ったことを率直には言いにくい。

しかし、この授業では、私たち生徒は映像の親子とは一切関係がなく、これからも関わる機会があることは極めて低いのである。親子の人間関係を考慮することがないため、遠慮せず感じたことを書くことができたのではないかと考える。

ほめるということ

映像の親子は発達障害、自閉症が疑われる子どもとその親であったが、「本当にその可能性があるのか？」と疑問に思っていた。映像の中の子どもたちはみんな母親に何かを求めている。多くはほめられたいということではないかと

考える。確かに抱きしめて欲しいとか、遊んで欲しいといった気持ちもあったかも知れない。

映像の母親たちに共通していることは、子どもの行為をほめていないということだったと思う。子どもの興味関心があるものとは別の物へ注目を向けさせようとしたり、子どもの元へ行かずに子どもを見ているだけだったりする母親がほとんどであったと思う。

子どもは自分の行動に対する母親の反応をよく見ている。小さな子どもにとって母親を中心とした家族が自分の全世界なのである。その世界から良い反応をもらえなければ子どもは自信をなくすのである。だからこそ映像の子どもたちは母親に対して甘えているようでどこか寂しそう、無愛想な感じだったのではないかと考える。

最後のほうに見た映像で、ストレンジャーと遊んでいる子どもが母親と関わっている時より楽しそうに遊んでいたのが私にはとても印象に残っている。その時ストレンジャーは子どもがやりたいことに協力し一緒に遊び、できた時にはほめるということをしていた。この人はほめてくれる、認めてくれるという気持ちが子どもに芽生えたからこそ楽しそうに遊んでいたのだと思う。

ほめるということが大切なのは、小さい子どもに限ったことではないと思う。私は小さい頃から発達が早く、要領も良い方だった。そうすると、自分ができたことやってきた事に誇りが持てないのである。誇りを持つどころか、「できなかったらどうしよう」と焦ることが多い。そのために自分の全力が出せないこともあった。しかし、現在カウンセラーや関わりの深い教授から「これができるなんてすごい。偉い」とほめてもらえるようになったことで、落ち着いて何かをすることが少しずつできるようになっていると感じている。

ほめるという成功体験を与えることが、人にとって一番その人を作る材料になるのではないか。ただ観察の仕方、ものの見方の引き出しを増やすだけではないことも学び、自分の性格、考え方についても振り返ることができる授業だったと思う。

<コメント>

私が日頃強調している「違和感を大切にする」ことの難しさを、この学生は

言葉にすることの難しさと述べているが、それとともに、その壁を乗り越えるために、「何かを言語化するためには、まず『誰の』『どの行動』に違和感を覚えたのか、それに対して自分は『どんな気持ちになったのか』という点に着目すれば、ある程度言語化することができることに気づいた」と述べている。つまり、自分の主観的体験を大切にすることに気づいている。この指摘はじつに素晴らしい。感心させられた。

V. 考察

1. アクティヴ・ラーニングとしての感性教育

学生たちの体験談に多く語られているように、今や大学での講義の多くが専門知識の教授を中心として行われており、大学受験教育ですっかり身につけてしまった受動的学習が大学でも変わらないまま続いていることが危惧される。

この種の学習がもたらす最大の弊害は、どこか自分の外に、つまりは客観的に、正解があるとの前提で、知識を取り入れるという受動的姿勢が固定化し、自らの存在を介して自らの頭で考えることがおろそかになることである。

対人援助職の育成に関わる学問は人間科学と称され、近代科学で長足な進歩発展を遂げた自然科学とは質的にまったく異なったものである。その最大の特徴は自然科学が自然という客体を対象としているのに比して、人間科学では人間が人間に直接関わる事象を対象とする学問である。それにもかかわらず、人間科学においても自然科学の研究手法を安易に取り入れ、「客観的」エヴィデンスをもとに研究しようとする傾向が続いている。

対人援助職の世界で重要な鍵を握るのは、対人援助の場での事象の質的検討である。人間が人間と関わることによって必然的に立ち上がる関わり合いという事象は、接面で生じる主観あるいは間主観の世界であるゆえ、援助者が一方の当事者としていかに関わり体験するか、その主観的体験を抜きに、対人援助職の質的検討をすることは不可能である。ここに人間科学におけるエヴィデンスの自然科学のそれとは異なる決定的な差異がある。それはいわば記述的、反省的エヴィデンスと言えるものでなくてはならない（小林・西、2015）。

具体的な母子交流場面を観察し、感じたことを率直に語り合うというごく単

純な方法で始めた「感性教育」であったが、今回の学生たちの率直な体験談を読むと、100名近くの大人数での方法であったにもかかわらず、これほどまでの評価を得たことは、正直私自身大きな驚きであった。

当たり前のことではあるが、学生たち誰もが予断偏見なく主体的に人物を観察し、そこで素朴に感じたことをもとに理解を深める作業をする中で、新たな自分を発見し、さらにそれが新たな気づきを生むという好循環が生まれ、それが彼らにとって大きな喜びとなっていることが伝わってくる内容である。感性教育はアクティヴ・ラーニングとして捉えることができる（小林、2019a）ことがここにも示されている。

2. 自己洞察を介した他者理解を可能にする感性教育

感性教育を試みようと思いついた動機の一つに、人間観察という営みが人間にとってどのような体験なのかを実体験し、日頃から自分をどのように鍛えることが求められるかを体感してもらうことであった。この種の体験は対人援助職に従事する際に、常に求められることで、それを可能な限り早い段階で体験してもらうことが重要だと考えたからである。

幸いなことに、今回の試みに対して多くの学生が肯定的な評価を下していたが、そこで彼らは従来の教育では味わえなかった体験を異口同音に語っている。人間観察はお仕着せの方法で事を済ますことはできない。なぜなら観察する当事者は一人ひとりすべて異なり、それが観察に如実に反映するからである。だからこそ人間観察力を鍛えるためには、自らの人間力が求められる。それは自分自身の内面を磨くことなくして達成することはできない。深い人間観察が可能になるためには、自分を深く理解するという自己洞察が求められるということである。対人援助職の専門教育でそのことを忘れてはならない。

おわりに

最後になるが、ある学生が現行の大学教育に対して以下のような率直な意見を述べている。

(29 女性) 最近の学生は自分自身の意見を述べないだとか、自分の考えを持っていないだとかいう意見をこれまで頻繁に聞いてきました。しかし、それは「述べない」のではなく「述べたくても述べられない」ものだったのだと思います。なるべく正解に近くて周りのみんなと同じような意見を述べておけば、だれにも叱られないし、笑われないし、楽だから、という考えの学生が増えてしまい、そのような意見を言うようになってしまったのだろうと考えます。こんな考えをする学生が増えてしまったのも問題ですが、なぜそうなってしまったのか、こんな状況をどうすれば抜け出せるのかについて真剣に向き合って考える授業はこれがはじめてだったように思います。また、たまに授業の中で自分たちの意見を先生がどう受け止めてくれているのかを聞ける機会があったことで、自分自身の考えを聞いた相手がどのように感じて、それに対してどのような意見を持ってくれているのかを知ることができたのも良い経験であったと思います。

学生たちはみな「主体的・対話的で深い学び」を求めている。私も含め対人援助職の人材養成に関わる教員は心して日々の教育に臨まなくてはならない。肝に銘じたいものである。

聴講した学生の 6 割近くが自発的に体験談を寄せてくれた。かなり大部の論文となったが、それでも紹介できたのは 50 名中 12 名 (24%) 分でしかない。すべての体験談が含蓄と示唆に富んでいた。できれば全てを紹介したいほどであった。なぜなら彼らの生の声を聞くことにこそ私たち教育する者が学ぶものが多いからである。率直な体験談を寄せてくれた学生全員に感謝の気持ちを述べて筆を擱く。

文献

- 藤井千春 (2017). 子どもが「深い学び」を遂げるために—「この子」の意味世界の生成・発展を読む。西南学院講座 in Tokyo 「アクティヴ・ラーニングの目指すもの—『深い学び』と『感性を磨く』—(臨床と哲学のあいだ Part 4)」配布資料、pp.12-40。ステーションカンファレンス東京サピアホール、2017. 11. 3.
- 小林隆児 (2014). 「関係」からみる乳幼児期の自閉症スペクトラム—「甘え」のアンビ

- ヴァレンスに焦点を当てて一. ミネルヴァ書房.
- 小林隆児 (2016a). 2015 年度後期教育インキュベートプログラム「臨床能力向上のための録画ビデオを用いた感性教育の試み」報告書. 2016. 3. 20. 私家版
- 小林隆児 (2016b). 発達障碍の精神療法. 創元社.
- 小林隆児 (2017a). 2016 年度前後期専門演習「臨床能力向上のための録画ビデオを用いた感性教育の試み (その 2)」報告書. 2017. 2. 15. 私家版
- 小林隆児 (2017b). 臨床力を高めるための感性教育 (研究叢書 No.42). 福岡, 西南学院大学学術研究所.
- 小林隆児 (2017c). 臨床家の感性を磨く一関係をみるということ一. 東京, 誠信書房.
- 小林隆児 (2018a). なぜ「感性教育」は学生に深い自己洞察をもたらすか. 西南学院大学人間科学論集, 13(2); 215-243.
- 小林隆児 (2018b). なぜ多くの学生が母子間のアンビヴァレントな情動の動きを感じ取ることができないか—「感性教育」の新たな試み—. 西南学院大学人間科学論集, 14(1); 279-318.
- 小林隆児 (2018c). 常識 common sense を疑い、共通感覚 sensus communis を呼び醒ます—「感性教育」の目指すもの—. 西南学院大学附属臨床心理センター紀要, 創刊号, 2-7.
- 小林隆児 (2018d). 臨床家にとっての初期体験の重み. そだちの科学, 31, 96-98.
- 小林隆児 (2018e). 「教えられる」学びから「気づく」学びへ——感性に働きかけることはなぜ学生のところに響くか——. 西南学院大学学生相談報 2017 年版, 第 30 号, 4.
- 小林隆児 (2019a). 大学新生を対象としたアクティヴ・ラーニングとしての「感性教育」の試み. 西南学院大学人間科学論集, 14(2); 161-217.
- 小林隆児 (2019b). なぜ感性教育は大学生の人格発達を促進するのか. 西南学院大学人間科学論集, 15(1); 145-180.